

ペシャワール会報

No. 3

～アジアで共に生きる～



ペシャワール通信(1) 中村 哲 (2) 第1回総会報告 (5)
ペシャワール会北九州集会 (5) 会計からのお知らせ (6)
会員の皆様から (6) 会 則 (6)

ペシャワール通信(1)

中村 哲

(パキスタンへ「帰る」)

一九八四年五月二十五日夜九時、イスラマバード空港にPIAのジェット機が到着した。これが一九七八年以来六度目のパキスタン訪問である。夕刻に機窓からカラコルム南方の白峰群をみる。すぐに厚い雲の中に消えてしまったが、機首がパキスタンに近づくにつれ、自分が何ものかに帰帰しているという奇妙な感動を押しやる事ができなかった。

飛行機を下りると、吹きつけてくる熱風やシャルワール(国民服)をまとって歩き回る人々の喧騒がたまらなくなつたかしく感ぜられた。ふと二年前、二年前、三年前……とこの国を訪れた時の記憶が連続してよみがえってくるのに気づく。この一年の日本や英国での研修生活が、今の自分の世界とは無縁な、なにか夢のような空白に感ぜられるのである。私はこの一年間何をしてきたのだろう。まるで六年前に最初に訪れてから、ずっとここで生活していたようにさえ思える。

空港では福岡登高会の新具さんと日本大使館員が迎えてくれ、税関も何なく通過した。いつもゆきつかけのラワルピンディのホテルにおちついたが、道路が少し綺麗になった以外は、何もかも

六年前と変りがなかった。「ドクター・サーブ、またきたね。」と声をかけてくる酒好きのムスリムのマネージャー。チップが欲しそうに水を運ぶ給仕。カイゼルひげが自慢の尊大な食堂の給仕。みな変りがなかった。ここでは時間が停止している。私もまた、この停止した時間の中からたまに日本に飛び出しては戻ってくる旅人にすぎなかった。



ハンセン病棟にて

「なつかしいペシャワールへ」

到着後数日間は、ビザのことで大使館員の山村氏、JOC Sの船戸氏と共に、イスラマバードの役所をかけずり回り、五月二十八日になつかしいペシャワールに到着した。ラワルピンディからハイウェイで約三時間半の道のりである。暑い。強烈な陽光の下に、草も木も家々も、のろろと歩く人々も、みなうなだれるように、光と陰影の世界を作る。

胸の躍る思いをおさえてミッシン・ホスピタルの門をくぐる。顔なじみのスタッフの前でサングラスを外してみせると、一瞬まるで亡霊でも見るかのように驚いていた顔が、急にほころんで笑顔となり、抱きついて再会を喜んだ。そしてみなに報告にとんでいった。

一般病棟も、ライ病棟も、古いモスクを改造した礼拝堂も、スタッフたちも、全て変りがなかった。昨年来病院内では私がまもなく来るといふ誤報が毎月とびかい、首を長くして待っていたとのことである。ライ病棟では、古い患者たちが私をみつけると眼を輝かせて抱きついてきた。二ヶ月前に配属されたというシスターが病棟の責任者になっており、この若くて気のよい長身のドイツ人看護婦は、小柄な私を見おろしながら嬉しそうに私を歓迎してくれた。病棟ではライを専門に診療してくれる医師の監督が不十分で、スタッフも心細かったのである。

しかし、患者もスタッフも、まるでペシャワールの雲一つない輝く青空のように、底抜けに陽気で明るかった。ここでも私は、またやってきたというよりは、帰ってきたのであった。変形して崩れたライ患者の手先の、ごつごつした手ざわりを何度もなつかしく確認した。彼らの無邪気な笑顔を見るだけで、日本でのつまらぬ人間関係の心配などはふきとんでしまった。この笑顔をみるために私はやってきたような気がした。あとのことはささいな、どうでもよいことのように思えた。

院長のウジャージャー夫妻は相変らず多忙な毎日を送っていたが、心よく様々の役所の手続きを、時間をさいて手伝ってくれた。

「不思議な住民―パシュトゥーン」

病院のうら手は、ペシャワールでも最も歴史の古いキッサハーニ・バザールというところにあたる。紀元前四世紀にはすでに大きな市として栄えていたといわれる。アフガニスタンのカブールから密輸される様々の品物が、このバザールに流れてくる。日本製のテレビ、ラジオ、中国の陶磁器、ペルシア絨毯、ロシアのサモワール、はては麻薬から機関銃まで、女以外の全てのもはここで手にいれることができる。日没と共にいざことも知れず人が湧き出して街路を埋め、コーランを誦める声と共にバザールは活気を帯びてくる。街路を歩いていると、「ジャパニ(日本人)か、チニ(中国人)か」としばしば店主に呼び止められ

る。呼びとめては茶をとりよせ、珍客と歓談するのが彼らの楽しみの一つでもある。ここはパシュトゥーンの町である。

北西辺境州からアフガニスタンにかけて約千二百万人居住すると言われるパシュトゥーンは、古代からこの一帯に居住する精悍な山岳民族で、謎の多い不思議な人々である。足を組んで坐っているバザールのチャイカナ(茶店)の主人が世界情勢に精通したインテリであったり、高笑いで冗談をとばしている粗野な男が生命をかけてアフガングェリラに献身する立派な外科医であったりする。路上に腰かけているうす汚れた老人が、突然親しげに話しかけてきて、自分がインド国民軍の士官として日本軍と共に戦った思い出を語り出すこともある。雑然とならぶ店々とうす汚れたシャルワールをまとうてゆきかう精悍な顔だちの人々の雑踏の中で、文字通り魔法の絨毯にでも乗って、彼らが世界中をゆきかっているような錯覚にさえとらわれるのである。

「パシュトゥーン」をぬきはこの北西辺境州を語ることはできない。常に銃と自由を愛し、自分たちの掟で(パシュトゥヌワレイ)以外の何ものにも従わない彼らは、いかなる支配も拒絶する。それは、彼らの底抜けに明るい性格と相俟って非常に親しみを私に感じさせるのである。

(英国植民地政策とキリスト教の宣教)

しかし、一步スラム地区や難民キャンプ、農村

部に目を転ずれば、異国情緒などにもひたってはおれない。旅人の目には魅力のあるこの土地も、一旦人々の暮しの現実をみれば、他のアジアの国々と同様、多くの難問をかかえている。高い乳幼児死亡率、不衛生による感染症の蔓延、低い教育水準、貧困、人口増加、急激な都市化による諸問題、等々が山積している。英国統治時代にうけた傷跡は今なお深いものがある。

想像を絶する遠大な規模の収奪が周到に、徹底して行われた。十八世紀からの「アジア学」と称するイスラムに対する偏見の撤布に始まり、ひきつづく英国のミッシュナリー(宣教師)たちの活動は、本人たちの意図はどうあれ、インド亜大陸のムスリム支配の手先としての役割を遺憾なく発揮した。少くともパキスタンの住民はそう信じているが、決してそれは被害妄想とも言えない。

(西欧人の目を通してみるイスラムは、野蛮で、迷信的で、愚かな異教社会の規範であった。それは西欧を範としてきた日本人のイスラム観にも大きな影響を与えてきた。石油問題がうかびあがるまで、その誤解が検討もされなかったのは残念なことである。)

日本のクリスチャンたちの誤解を招くことを敢えて承知で述べれば、イスラム勢力の弱体化のためにキリスト教宣教が行われたのであり、それは少くともこの地では決して良きものをもたらしなかつたといえる。それは、十字軍遠征の続き

であったといっても過言ではなからう。北西辺境州は文字通りそのフロンティアとなつたのである。

(ダブガリ庭園小史)

現在のミッシン病院のおかれている土地—Dabgar Gardenとその建物の歴史そのものがそれを象徴している。

私の住居の真向いにムガール様式の美しい形をした円形の建物があり、現在はチャペル(院内



ペシャワール病院正門

のキリスト教徒の礼拝堂)として使用されている。私は毎朝この前を通つて病棟に行く。

十六世紀に建立されたこのドームは、ベルシア風の庭園に囲まれた王室の冬の別荘として使用されていた。(その庭園が現在の病院の敷地にあたる。)しかし、その後は一般に開放されてモスク(回教の礼拝堂)として使われるようになり、十九世紀初頭から本格化する大英帝国の進出に抵抗するムスリムの根拠地となる。十九世紀中期にペシャワールを拠点とする極めて戦闘的な反英反乱は、やがて英印軍の手で鎮圧されるが、カイバル峠にしりぞいて抵抗を続けるパシュトゥン部族との戦いは継続される。英軍はこの庭園を接收して部隊の駐屯地とし、本部をそのドームに置いた。その後第一次・第二次アフガン戦争によってカブルより敗退した英軍は、より強力な大部隊の投入を行う一方、純心なミッシンナリーたちを利用して、医療活動をエサにしてキリスト教の布教を始めた。

これが一八九七年のペシャワール・ミッシン病院の始まりである。英軍司令部のおかれていたドームは病院のチャペルとなり、部隊の駐屯地には病棟が建設された。敬虔だが偏狭なミッシンナリーたちは、しばしば現地の民心を無視してトラブルをおこしたが、それにもかかわらず、ペシャワール市の重要な医療センターの役割を果たして今日に至っている。しかしこれは、公平な目

で見ても、やはり現地パシュトゥン住民に対する懐柔策の一環であったといえよう。一九七二年に現職のウジャヤーカー氏(パキスタン人)が就任するまで、歴代の院長は英国宣教師により英国人が任命されていた。

今私は、この病院のチャペルのドームを見上げる毎に、ここに込められた住民たちの血と汗と涙が濃縮して壁にぬりこめられているような気がして、深い感慨を覚えるのである。朝もやにかすむドームは、人々の悲しみや怨念がヴェールをまとつて、つつましく、しかし激しく人間の愚行と蛮行を無言のうちに非難しているように思える。われわれは今何をするかを求められているのだろうか。

ともあれ、私はここに帰ってきた。六月からはマリーにあるウルドゥ語学校に通う。ペシャワールとまたしばらく別れるのはさみしくもあるが、摂氏五〇度の暑さを避けれると思うと嬉しくもある。



第一回ペシャワール会総会報告

一九八四年五月六日、福岡市中央市民センターにて、中村哲医師のバキスタン赴任を直前にして、ペシャワール会総会が開催されました。昨年九月の発会式には、会としての行末を案ずる気持と、参会者一人一人の海外医療協力に対する希望とで若やいだ雰囲気包まれていましたが、今回はそれに加えて、具体的な活動計画が加わり、身のひきしまる思いが致しました。

問田会長の開会挨拶に続いて、佐藤事務局長の現況報告が行われ、一三〇名余りよりなる会の成長と、事務報告がなされました。実に多くの各界の人々の善意と友情に支えられて歩んできたことを物語っているものと言えましょう。続いて事務局より運営委員の構成についての提案が行われ、運営委員十二名、幹事一名、監査一名、事務局九名が選任され、ここに正式にペシャワール会運営委員会および事務局として発足致しました。

佐藤赫子さんより、中村哲医師に同行する尚子夫人、秋子ちゃん、健君とお母さんの秀子さんが改めて紹介され、参会者より励ましの力強い拍手が贈られました。中村医師はもとより御家族皆様の健やかなることを参会者一同が願ったことと思います。

伊藤邦幸氏より、「人を送り出すとは」と題して、国際間の制度の違いを越えて働くワーカーの働きと、支援する人たちとの一致等についての報告があり、塩月賢太郎JOCSS総主事の「JOCSSの働きについて」を通して、海外医療協力の意義について説明がなされました。

中村哲医師からは、スラム地区での医療活動や移動診療ユニットの形成について活動計画が示され、ワーカーと結合するペシャワール会員の決意も新たにされたことと思います。続いて福岡登高会を初めとして、各方面の方々からの発言がなされ、この様に多くの方々の思いを代表して中村医師が赴くという事実が改めて確認されたものと思えます。

(書記 宮崎 信義)

ペシャワール会北九州集会

中村哲医師のバキスタンでの医療活動を支援するペシャワール会の北九州集会在去る五月十三日(日)午後二時より、北九州市戸畑市民会館小ホールで開かれた。当日は生憎と雨天で、しかも市内における諸種の催しなどの関係もあり、参会者は三十名余りであったが、極めて有意義な集りであり、参会者一人一人に深い思いと感銘を与え、支援の気持を一層新たにさせられた次第でした。

当日はまず発起人の一人である吉沢傳教氏の司会で始まり、開会挨拶を準備委員である田代栄二氏によりなされ、ついでペシャワール会事務局長佐藤雄二氏より、これまでの経過報告と今後の取り組み等について報告、続いて特別来会者のスピーチとして福岡登高会会長新貝勲氏により、山男としての体験談と中村医師を送るに当たっての力強い激励のことはがのべられた。続いて中村さんの紹介を発起人の一人であり、相談役の労をとっていられる佐藤誠氏よりなされた。中村氏のスライドによる現地説明と、ペシャワールに赴くことを決意したこと、経緯、特にこれらの業は長い時間と忍耐と継続性をもって当らなければ成就できないことで、日本人の良心の灯を多くの心ある人々と共に絶やさぬよう微力を捧げたい旨の決意表明あり、淡々と語られる中村さんの実直な訴えは、それだけに中村さんを通してアジアの民衆に連帯し、共に生きる姿勢を私達に強くアピールし、支援の輪を拡げていくことの大切さを一人一人に改めて教えられた次第でした。

続いては中村氏のご母堂による挨拶。ついで参会者の中からまず中村さんのご母堂の友人である星野ヨシエさんより女性として人間味あふれる激励の言葉。ついで北九州YMCAの後藤則之氏による力強い支援のアピール。そして準備委員の一人である西沢美代子さんより女性の立場と外国居住体験者の一人として激励の言葉あり。閉会の挨拶を西南女学院院長井上義巳氏によりなされ、約二時間半にわたる当集會を意義深く、無事に終了することができて感謝であった。

(北九州集會準備委員代表 田代 栄二)

会計からのお知らせ

1984年6月23日現在

セット等全49品目)の購入費用一

(1)会員数	1,609名	
(2)収入	5,452,244円	
内訳		
1. 前年度より繰越	3,695,035円	
2. 会費収入	862,665円	
3. 一般寄附	572,497円	
4. 指定寄附(福岡徳州会病院より)		300,000円
(3)支出	3,659,359円	

2. 総会諸経費	86,050円
(福岡・北九州分)	
3. 事務費(通信費、資料印刷等)	112,009円
4. 人件費	72,000円
5. JOCS 役員旅費宿泊費他	88,900円

1984年度会費納入のお願い

内訳 1. 中村医師への援助費
 ー現地への赴任交通費・現地滞在費用・医療器機類(吸引器・検眼鏡セット・レスキュー

すでに納入して頂いてる方も沢山いらっしゃいますが、会計年度を4月1日から翌年3月31日としました。郵便振替用紙を同封していますのでご利用下さい。(才藤千津子)

会員の皆様から

会員の輪を広げるために、各地で様々な運動がなされていきますので、幾つかの動きを紹介いたします。

◆結婚式を簡素化し、経費をペシャワール会に指定寄附

会員の安陪等思さん、由佳子さん(旧姓泉)は、披露宴をの他を質素にされ、ペシャワール会と中国残留孤児援護基金に対し、多額のご寄附を頂きました。

◆故、猪城輝さんのご遺族よりペシャワール会に指定寄附

喪主の猪城博之さんのお申し出があり、ペシャワール会に多額のご寄附を頂きました。

◆丸二商会、会社をあげて会員拡大

KK、丸二商会では、会員の江頭千鶴子さんが中心となり、社員のおほとんどの方が入会頂きました。そしておみえになるお客様をはじめ、社員の友人、知人にこの輪を広げておられます。

◆福岡市役所内にペシャワールの輪広がる

博物館準備室副主幹の三宅安吉さんが中心となり、職員、来訪者を中心に入会が続出しています。

◆ロータリークラブでも取り組み始まる

若松中央(井上さん)福岡西(篠原雷次郎さん)等の働きにより、多くのロータリークラブで、中村さんへの支援の輪が広がっています。

◆福岡YMCA会員森ユキさんも健闘

森さんはいつも入会書を片手に、会員勧誘に力を入れて頂いています。

◆NHK福岡放送局でも協力

ガンテラ美術展開催にあたり、来館者へのアピールをして頂いています。

その他、登高会、徳州会、香住ヶ丘教会、肥前療養所、Y

MCA、北九州、西南学院をはじめ、各地で会員の輪を広げる運動が展開されています。(志満 秀武)

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、JOCSの「共に生きる」という理想に賛同し、中村哲医師のパキスタン北西辺境州での医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、派遣母体であるJOCSを通して必要な協力を行うが、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑤ 会員は一口年額一〇〇〇円以上の会費を納入する。ただし三口以上の人は同時にJOCSの会員になることができる。
- ⑥ 本会は会誌の発行を行ない、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 毎年の改選は毎年総会にて行う。
- ⑨ 毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩ 本会の事務局を福岡YMCA

(〒八二〇 福岡市中央区大名二二二八

☎七八一七四二〇)内におく。